

世界の切手発行をふりかえる

小川 義博

最近の日本切手の乱(濫)発状態を考えると

◎日本の切手の発行状態は世界各国の切手の発行状態の中でどのような位置づけにあるのか?

◎切手の発行は時代の流れでどのように変化してきたのか?

◎切手の発行に影響を及ぼしている要因があるとすればどのようなものが考えられるのか?

等を知っておく必要を感じたので下記の方法で切手の発行状況を調べた。

検討対象として

SCOTT Postage Catalogue で主要な国の郵便創業以来発行された切手のうち、航空切手、寄付金付切手、料金不足用切手等を除く切手を年毎に2002年まで集計し、整理した。具体的にはSCOTTで国別で番号の頭にアルファベット文字のついていない切手を対象とした。日本切手では前述した切手に加えて地方切手を含まない通常、記念、公園、年賀、各シリーズ切手類である。

またSCOTTで複数年にまたがり発行されていると記載されている連続番号の切手ははじめの年に発行された切手として一括扱うこととした。

表1 検討対象国

USA	UNITED NATION	AFGANISTAN	ALBANIA	ALGERIA	ANGOLA	ANTIGUA	ARGENTINA	AUSTRALIA	AUSTRIA
AZERBAIJAN	BELARUS	BELGIUM	BHUTAN	BOLIVIA	BRAZIL	BULGARIA	CANADA	CEYLON	CHILE
CHINA(Taiwan)	CHINA P.R.	COSTA RICA	CUBA	CZECHOSLOVAKIA	DENMARK	ECUADOR	EGYPT	ETHIOPIA	FINLAND
FRANCE	GERMANY	DDR	GHANA	GIBRALTAR	GREAT BRITAIN	GREECE	GUTEMALA	GRENADA	HUNGARY
ICELAND	INDIA	NETHERLAND INDIE	IRAN	IRAQ	IRELAND	ISRAEL	ITALY	IVORY COAST	JAPAN
JORDAN	KAZHSTAN	KOREA	KOPR	KUWAIT	LIBERIA	LIECHTENSTEIN	LITHUANIA	LUXEMBOURG	MACAO
MADAGASCAR	MALAYSIA	MEXICO	MONACO	MOZAMBIQUE	NEPAL	NETHERLAND	NEW ZEALAND	NICARAGUA	NORWAY
PAKISTAN	PANAMA	PAPUA NEW GUINEA	PARAGUAY	PERU	PHILIPPINES	POLAND	PORTUGAL	ROMANIA	RUSSIA
EL SALVADOR	SAN MARINO	SAUDI ARABIA	SLOVAKIA	SOUTH AFRICA	SPAIN	SWEDEN	SWITZERLAND	SYRIA	TAJIKISTAN
TANZANIA	THAILAND	TONGA	TUNISIA	TURKEY	UKRAINE	URUGUAY	VATICAN CITY	VENEZUELA	VIET NAM
YUGOSLAVIA									

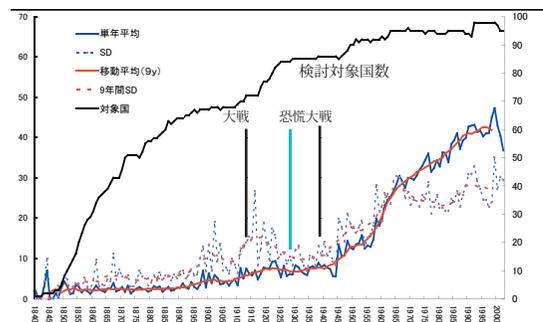


図1 対象国年間平均発行数と発行数とばらつき

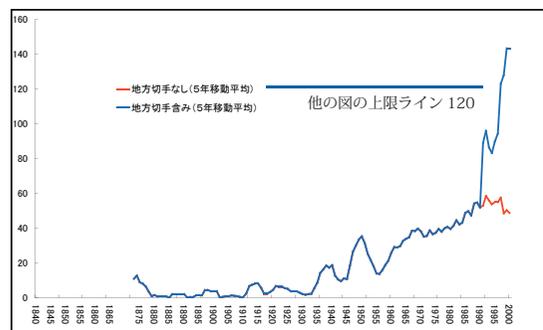


図2 日本切手切手発行数の推移

対象とした国は主要国と早期郵便開始国、60年代独立した新興国、ソ連崩壊後の独立国、および切手で古くから話題を提供してきている小国など表1に示す101ヶ国を対象とした。以上のようにSCOTTというCATALOGUEの枠の中での検討に終わっていることを明記しておく。

160年間の発行数の推移

対象国全体の160年にわたる切手発行の推移は図1に示す。単年度の変動の多さとScottの数年間に発行のまたがる通常切手、シリーズ切手の連番扱いの偏りの修正を図るため9年間の移動平均値を計算し単年の平均値とあわせて図示した。また各国間での発行数のばらつきを見るため標準偏差を単年と5年間の移動平均で図示した。

160年を全体的にみると大きく3つの時期に分けられるのではないかと考える。発行数が各国ともばらつきが少なく年間10程度と少ない1890年ごろまでの第1期、ついで発行数にばらつきが大きくなり発行数が徐々に増加していく1945年ごろまでの第2期、そして発行数の増加に比してばらつきを大きくすることなく発行数をましてきている1970年ごろまでと増加の程度は同じでもばらつきが大きくなる1980年以降今日までと二分できるかとも捉えられる第3期と考えられる。第2期が他期と異なる傾向を示していることはこの時期、ヨーロッパ、南米諸国、中東の多くの国のインフレによる経済不安による郵便料金の変動が影響して他の国と異なる発行数の増加を示していることの影響であろうか。

次に図1と同じ尺度で日本の発行の推移を図示したのが図2である。地方切手発行以降は2種の

線で数を分けてある。なお、地方切手はペーン、小型シートは数に含まない。図1と比較すると1930年代までは他国の平均より低い値で発行されて来たのが40年以降は10-15以上多い値を示してきており地方切手を含むと世界で発行数非常に多い島嶼諸国並みの値を示してきている。

次に、全体としてみえる事は社会情勢が発行数に影響を及ぼしているのは図1に示すごとく第2次世界大戦まででありそれ以後の発行数はそれまでと異なる国家財政の財源という要因が急速に高まり増加の一途を見せていることが考えられる。

次に、全体の流れの中での個々の国、地域の要因などを見てみた。まず発行数と年間平均発行数の多い順位整理したのが表2,3である。共産主義体制にあった国々の発行数が多いのが際立っており国策としての切手発行が明らかである。さらにソ連崩壊後、これらの国の発行数はわずかに減じたのみで、ソ連から分離独立した国々が過去の共産国と同じ程度の発行を行っており切手発行による国家財政への寄与を図っていることが注意される。また、最近の傾向として郵政民営化の流れのもとこの傾向が経済大国にも明らかに見られる。歴史的に早くから切手発行を国家財源として位置づけてきたと考えられるMONACO、VATICAN等4国は総数、平均ともに中間に位置しており節度ある発行状況が見られる。

逆に発行の少ない国としてはヨーロッパのベネルックス、北欧等の小国と中南米の経済規模の小さい国々が位置している。日本は25-30に位置しているが地方切手をふくむと発行数でSPAIN、平均数で20-23程度になり、期間を最近10年に限定す

表2 切手発行数国順表 表3 年間平均発行数順表

	国名	総発行数	年数	国名	念平均発行数	年数
1	RUSSIA	6739	146	DDR	63.37	44
2	ROMANIA	4554	145	VIET NAM	59.52	52
3	CUBA	4274	148	CHINA People's republic	58.54	54
4	BULGARIA	4244	122	TANZANIA	56.92	39
5	HUNGARY	3818	132	GHANA	49.59	46
6	USA	3746	157	RUSSIA	45.71	146
7	POLAND	3665	143	AZERBAIJAN	45.44	16
8	CHINA	3467	125	CZECHOSLOVAKIA	37.21	85
9	GRENADA	3271	142	BULGARIA	34.48	122
10	CHINA People's republic	3253	54	BELARUS	34.45	11
11	SPAIN	3204	153	BHUTAN	32.90	41
12	CZECHOSLOVAKIA	3180	85	KAZAHSTAN	32.09	11
13	VIET NAM	3169	52	UKRAINE	32.07	14
14	FRANCE	2915	154	ROMANIA	31.04	145
15	DDR	2858	44	YUGOSLAVIA	31.04	82
16	BRAZIL	2850	160	ALBANIA	29.69	90
17	IRAN	2845	133	HUNGARY	28.63	132
18	TURKEY	2840	140	CUBA	28.34	148
19	PHILIPPINES	2816	149	CHINA	27.22	125
20	PARAGUAY	2706	133	ISRAEL	26.60	55
	JAPAN	2535	132	JAPAN	19.20	143

黄色は共産国家を経過国

表4 国家体制、地域、時期等でみた発行数

国分類	第1期		第2期		第3期		全体	
	国数	平均 SD	国数	平均 SD	国数	平均 SD	国数	平均 SD
アフリカ	6	2.70 2.83	10	4.65 1.74	12	26.28 12.77	12	19.46 15.63
アラブ	3	5.29 2.42	8	8.80 4.73	9	25.24 5.17	9	18.63 3.01
4 COMMON WEALTH	4	2.19 1.34	5	3.77 1.28	5	27.97 4.73	5	14.35 4.72
ヨーロッパ	18	2.88 2.46	20	5.89 2.78	20	25.12 9.35	20	13.29 4.75
共産主義	6	2.34 1.29	9	9.30 3.44	13	59.68 14.64	13	40.47 13.39
観光立国	2	1.69 0.02	4	4.83 1.23	4	24.08 7.09	4	15.51 2.70
ラテンアメリカ	15	2.13 1.36	15	7.24 2.53	15	21.27 9.96	15	11.82 4.64
連邦崩壊独立			3	11.82 7.37	6	23.17 12.56	6	22.53 11.85
その他	11	2.72 1.99	13	4.36 3.56	17	31.03 13.00	17	18.63 7.17
総計	65	2.64 2.12	87	6.41 3.81	101	30.12 16.12	101	19.37 12.43
日本		4.2		4.926		37.67		19.2

れば上位1桁に位置する多発行国に位置する。

以上を分類して時期を分けて整理したのが表4である。どの国分類においても切手発行の増加は明らか出るが特に共産主義国の他の国々に比較して2倍以上という著しい増加を示している。また、比較的歴史の古い国々の間に発行数のばらつきが少なく一定の枠の範囲で発行が行われてきていることが考えられる。

今後、各国が郵便事業民営化の過程でこの傾向が継続していくのか、他の国の民営化後の切手発行の動向を見守りたい。

視点を変えて見る切手発行

1. 分断、統合と発行

国家の分断と統合を経験した国々の発行を見ると図3-図6のようになりかなり異なる推移を見せていた。

東西ドイツは明確に異なる発行方針に基づく切手発行が行われてきているが、中国、朝鮮は数の程度に差は見られるが基本的な傾向はほぼ一致したものがあるように考える。(SCOTTはKDPR・朝鮮民主主義人民共和国の発行数は1975までの掲載で終わっている。)

2. 国家財政を切手に頼っている国々

観光と切手発行を調和させているかと考える国々と切手発行

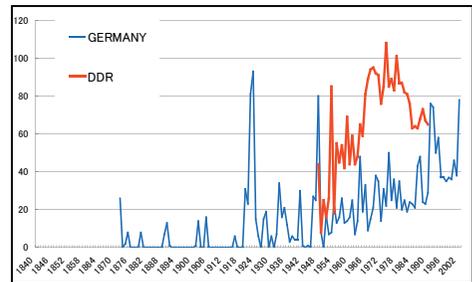


図3 東西ドイツ

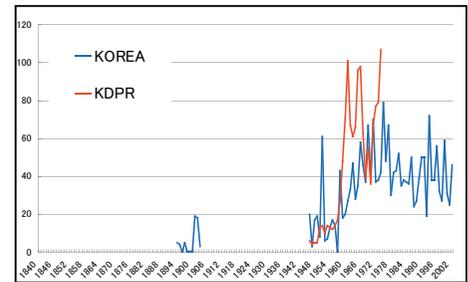


図4 南北朝鮮

だけをおこなっていると考える得ない国々に分けて図7、8に示した。

切手の乱発の先鞭をつけたのは観光立国の小国と考えられがちだが実際はこれらの国は乱発はせず堅実な発行頻度を維持してきている。

3. 切手の乱発の祖は?

ここで革命という切り口で整理してみると図9のようになり、切手発行を財政の糧にすることを小国に見た共産主義国が糧を大きく期待しての乱発という手段



図5 チェコ、スロバキア

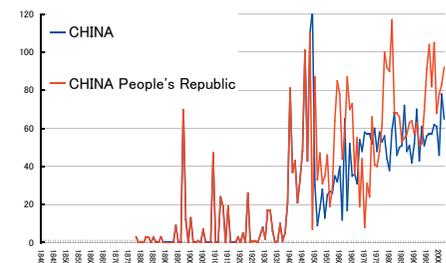


図6 中国、台湾

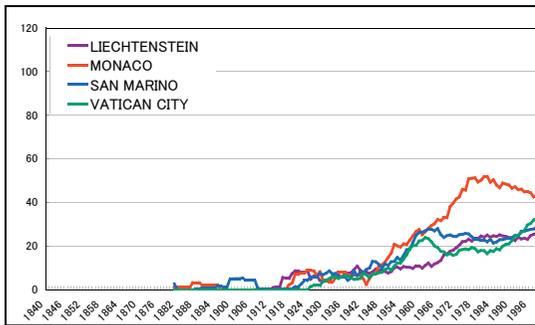


図7 観光+切手収入を意図すると考えられる国

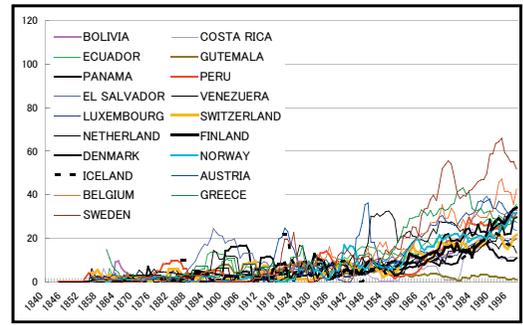


図11 Philatelist にやさしい西欧、中南米中小国

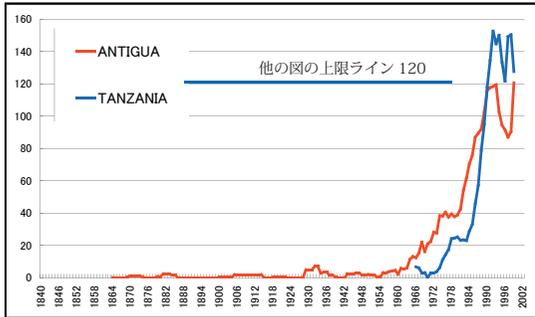


図8 切手収入を意図すると考えられる国

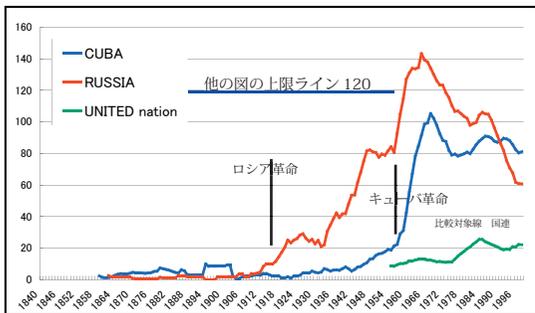


図9 革命がもたらした切手資金源

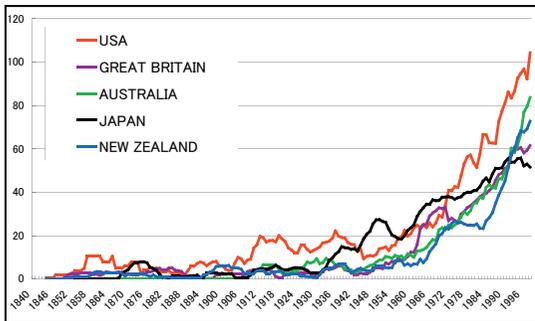


図10 切手乱発では後進国の経済先進国

を革命直後から行ってきたことが明らかであろう。

4. 背に腹は変えられなくなってきた国々

ソ連崩壊前後より東欧共産圏だけにとどまらずヨーロッパの中小国、中南米諸国を除く経済大国の乱発が目になってきた。この辺りを図示すると図10のようになり、図8の切手依存・乱発の島嶼国等と同じ発行頻度になっている。特にア

メリカの発行の増加が他の国より10年程度先を走っていることがわかる。今後、郵便の民営化をふまえてアメリカの切手発行がどのように推移していくか興味深い。

日本が発行が少なく見えるのは地方切手が含まれていない図のためであり本来はオーストラリアと同等の軌跡を示していると考えられる。

5. 節度ある発行を維持している国々

切手を集める立場のものにとって歓迎すべきな発行回数が増えず、節度ある推移を示しているのは前述したごとく、西ヨーロッパの中小国と意外な中南米の国々である。西ヨーロッパ諸国の動向は理解されるかと思うが、財政的面からキューバを範に切手乱発国に走っても理解できる中米諸国の切手発行の少なさは何を因とするか興味深い。

以上、国家体制、社会情勢に左右され切手の発行は多少の相違見せてはいるが、その幅を持ちつつ増加傾向は明らかである。

日本の世界で切手発行という枠での位置づけは

郵便制度の歴史（年数）そして切手の発行回数と増加曲線という事柄だけをとらえて世界の中での日本がどのような位置づけになるかを考えたい。（発行枚数、対人口比発行枚数などの事項がより重要であるが残念ながら調査は難しい。）

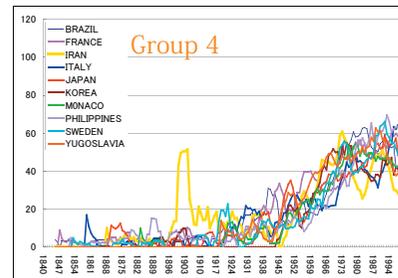
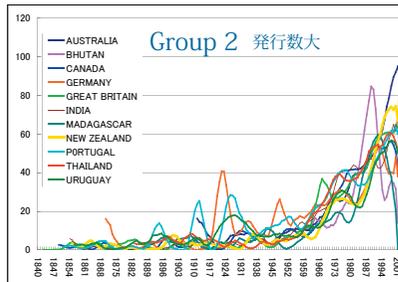
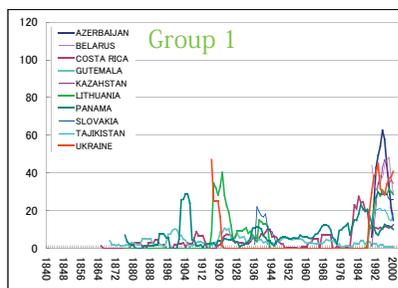
101国160年の発行数表をデータとして統計手法の手段で試してみた。

日本が他の100国の中でその歴史的な流れ、そして最近の切手乱発国としての動きを踏まえて他のどの国々と似た立場にあるのかを見るため多変量解析の手法であるクラスター分析を行った。なお標本数101にあわせるため変数を10年単位の発行数にまとめた16変数にまとめた。

分析の結果をテンドグラムに表したのが特図1であり大きく、切手乱発国グループ18ヶ国とそうでないグループ82ヶ国、そして超乱発国RUSSIAに分類できた。2つのグループはさらにいくつかのグループで構成されている。

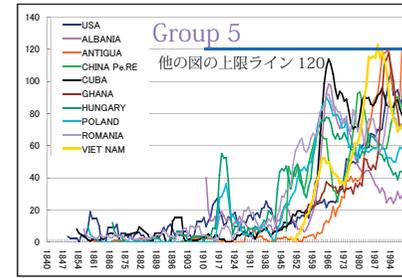
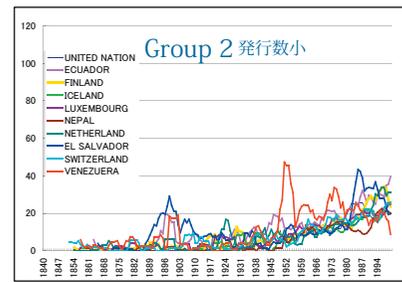
まず、乱発グループは乱発開始の時期の相違で早期乱発開始元共産圏諸国とUSAも含む乱発後進諸国に分かれる。さらに他国よりかなり早期に超乱発を開始したRUSSIA、最近に急激な乱発をしているTANZANIAの2国が特異な存在であることをわかる。残る82ヶ国は発行増加開始時期、1940年以前の発行状況の相違によって幾つかのグループに分かれていた。

このようなクラスター分析の結果をもたらしている要因（成分、因子）を見るために同じDATAをもちいて主成分分析を行った。その結果3つの成分で60%の情報を説明できた。これらの因子の各成分の各変数（年代）の数値は図12のようになり、第1成分は主として1940-1970年代の発行数、第2成分は1900年以前の発行数、第3成分はこの中間期の発行数であると考える。第1成分と第2成分の軸で各国を配置



すると図13の配置が得られ、テンドグラムとは異なり特異な切手発行を行ってきた国、もしくはは行っている国が中心から離れた位置にあり興味深い。

このような結果を踏まえ日本切手を考えると地方切手の発行状態が続くなら、乱発国グループ、そして布置図の外側に位置する国に成り果てるか、はたまた、すでに成り果てていると危惧するか、期待をするのか.....。



特図1 クラスター分析 dendrogram

基本となっているクラスターを構成する国々の切手発行推移グラフを5 Group 抜かし 上に図示

関連文献

- 大谷 博：世界各国の切手発行政策 早大切手研 50年 P232-237 1999年
- 水原 明彦：「黒い切手」はポイコットしよう 郵趣 1991.3 P10-13 1991年

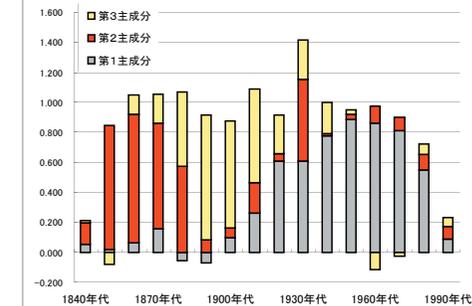


図12 各年代の持つ主成分分析の第1, 2, 3成分

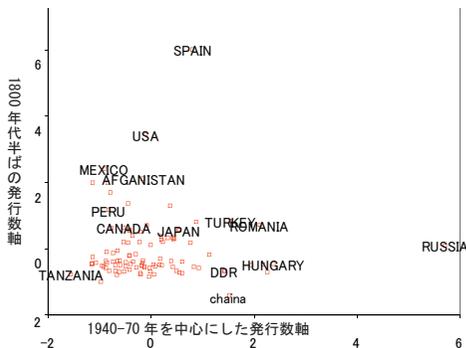


図13 主成分分析の第1, 2成分で各国の布置